



# 演説をいかに読み解くか？

— 近代日本における演説の受容と雄弁家をめぐって —

高野 宏康（非文字資料研究センター 研究協力者）

## はじめに

いま、「演説」が再び注目されつつあるようである。米国大統領選挙が空前の盛り上がりを見せた理由のひとつに、演説の魅力が大きかったことは誰もが認めるところであろう。日本でも CD 付きの演説集が次々に発売され、ベストセラーになるほどである。一方、日本では魅力的な演説をする政治家は少ないが、政治家の語り口に関心が集まり、大衆にわかりやすく表現できる政治家が良くも悪くも人気を集め、政局を左右するようになって久しい。政治理念の表現の仕方、伝達の過程に関心が向けられているということなのだろう。演説はその点に密接に関わるメディアなのである。しかし、これまで演説はレトリック学やコミュニケーション論などで研究されることが多く、演説から歴史や社会を読み解く研究は明治期の自由民権運動との関連以外ではほとんどなかった。

筆者は、戦前の政治家で演説の第一人者とされる、永井柳太郎の研究に取り組むうちに戦前の社会における演説の果たした役割の重要性を痛感するようになり、演説を歴史学的に分析する方法を模索してきた。永井は、学生時代に演説大会で大隈重信の知遇を得て、金沢で行った応援演説が注目されたことが政治家となる契機となった。議会では初当選後の「原敬批判演説」をはじめ、デモクラシーの旗手として長く語り継がれた名演説を多数行い、演説会では大衆に熱狂的な人気を誇った。著作は初期の学術書以外はほとんど演説・講演集である。つまり、永井は演説のちからによって社会的・政治的地位を獲得していったのであり、戦前の日本はそのような「演説による立身」が可能な時代だったことがわかる。しかし、そのことは一方で、戦時期には演説による戦争賛美へと永

井を向かわせた。戦後、演説が衰退するとともに永井も忘れられていったが、永井の「転向」には、演説というメディア形式の問題が深く関係していると思われるのである。

本稿は、これまでの知見をまとめ、非文字資料の一つとしての演説の特徴と分析方法について、ささやかな叩き台を提示してみようという試みである。

## 政治文化としての演説の特徴

まず、演説そのものの特徴について説明しておきたい。演説は基本的に「言葉で自分の考えを多数の人々に伝達する行為」と言え、広義には、落語などの口承芸能も含まれるし、宗教の伝道における説法なども演説ということになる。日本の場合、近代以降に西欧からもたらされた政治文化の一つとしての演説をいかに日本社会に則した形で取り入れるかが大きな問題となった。

明治初期に演説の日本への導入に尽力した福澤諭吉は、近代社会においては政治から日常生活に至るまで、人々は相互の意思を言葉で表現し、合意を形成していくことが要求されるため、それに対応する方法として演説の必要性を主張した。つまり、演説は福澤が理想とする近代社会を生きる自立した個人にとって必須のメディアとされたのである。演説の重要性を理解した人々は、熱心に演説会で自ら演説を実践し、他者の演説を聴いた。1875年には福澤が印税を投入して建設した三田演説館が開館し、馬場辰猪らの北辰社も演説会を開催した。1880年頃には、全国各地で演説会がさかんに開催されるようになっている。

演説の特徴として重要なのは、まず、主張内容を声と身振りで表現することである。当然ながら、



演説内容は議会政治論などの西欧思想が中心であり、声の出し方も身振りも日本の前近代社会で定型化した身体技法とは著しく異なっていた。そのため、演説の方法や技法について書かれた演説論や指南書が多数出版された。最初の本格的な演説論である、尾崎行雄訳述『公開演説法』（1877年）では、演説方法を15条に分類し、音声・身振り・服装など演説に関するさまざまな技法を図解入りで体系的に解説している。初期の演説論は音声や身振りについての技術論を重視していることが特徴で、当時の人々の関心が、これまで日本には存在しなかった声の出し方と身振りのあり方にあったことがうかがえる。

また重要なのは、演説は、行われた際のさまざまな要素によって規定される一回性のものである。すなわち、演説が行われた時期や文脈といった時間性、場所（地域、中央／地方など）・会場（屋外／屋内、街頭、広場、公園など）といった空間性、そして演説者（性格、年齢、性別、表情、身振り、演説人数、登場順など）・聴衆（階層、性別、年齢、人数など）、演説内容（政治論、外交論、文化論など）・形式（演説、講演、討論など）によって規定されるのである。また、演説内容についても、表現の誇張や省略、言い間違いなどが頻繁に起こる一方、レトリックや修辞、例え話が増えらることで、説得力が増減することもある。

いずれにせよ、政治思想としての純粋さを演説に期待することはできない。つまり、演説を分析する際には、演説者の主張（理念、政治思想など）がどのように表現され、聴衆に受容・理解（もしくは誤解）されていったかの過程の総体に着目することが必要となるのである。そのような観点から、論じる内容（普通選挙論など）を聴衆に説明する論理展開やレトリック、拍手や野次といった反応、演説後の評価を分析することで、当時の社会の心性や価値観、すなわち社会史的問題を明らかにしていくことが可能となると言えよう。デモクラシー思想の純粋さでは吉野作造らに及ばない永井柳太郎は、演説という表現形式に着目しなければ、その活動の意義が充分理解できな

いのである。

## 演説についてのさまざまな資料

演説がさまざまな要素に規定される一回性のものであるということは、演説を完全にそのまま再現することは不可能であるということの意味する。しかし、演説は、書籍や雑誌、レコードといったメディアで記録（表象）されているため、適切に資料批判を行うことでさまざまな情報を得ることができるのである。演説が記録された資料としては、書籍（演説集、演説論）、演説や演説評が掲載された雑誌や新聞記事、演説レコード、手書きの演説草稿、映像資料などが挙げられる。これらは、文字資料としての性格と非文字資料としての性格をそれぞれ別に持つ場合と、書籍のように、文章（文字資料）と挿絵・写真・図版（非文字資料）が融合している場合があるので、その点が分析の際のポイントとなる。以下、いくつか具体的な資料を取り上げて説明してみたい。

演説論は、尾崎行雄訳述『公開演説法』（1877年）の後、多数刊行されたが、当初は発音と身振りを重視した構成のものが多く、西欧の演説技法をそのまま紹介した「直輸入」的な内容となっているのが特徴である。そのような状況は、馬場辰猪『雄弁法』（1885年）刊行後に転機を迎える。同書は、洋書の翻訳・翻案にとどまらず、自分の経験や日本の演説の事情をふまえ、詳細に説明している。興味深いのは、技術論の必要性を主張しつつも、「熱心」すなわち精神性の重要さを強調していることである。以後、昭和期に至るまで、技術論と精神論のバランスは繰り返し問題にされる論点となる。

演説集も、欧米の著名な演説を収録したものから、次第に日本の雄弁家の演説を集めたものが多くなり、多数の読者を獲得した。大正期から昭和初期にかけて、大日本雄弁会講談社から刊行された『大演説集』シリーズは大ベストセラーとなっている（『永井柳太郎氏大演説集』は昭和10年初頭には146版を重ねた）。演説が行われた日時と場所が記載され、聴衆の反応（拍手や野次）も再現されており、新聞広告の「（演説を）聴け！」

というフレーズからもリアルさを強調していることがわかる。

自由民権運動の衰退、治安警察法（1900年）の影響などによる演説の沈滞期を経て、1910年に創刊された雑誌『雄弁』は、演説を通じて新たな段階に入った日本を建設していこうという抱負を掲げ、演説の復興の画期となった。巻頭には毎号、各校の弁論部の写真が掲載され、学生弁論大会を主催するなど、全国の弁論部ネットワークの形成に影響を与えた。その後、大正デモクラシーの隆盛に伴い、尾崎行雄や犬養毅が「演説の神様」となり、やがて永井柳太郎や中野正剛、鶴見祐輔らも雄弁家として著名になっていった。

この時期に演説を録音したレコードが登場したことは重要である。1915年の尾崎行雄と大隈重信を最初に、その後、多数の演説レコードが発売・配布された（現在、約90題目の存在が確認）。演説レコードはその録音形式によって性格が異なる。ライブ録音のものは、実際の演説の声質・音量・速度、聴衆の反応を知ることができ、大変興味深い。一方、録音時に草稿を持ち込んで朗読しているものは、文字言語の要素が介在していることに注意が必要である。演説の時期なども考慮して分析する必要がある。演説レコードは、昭和館などに多数保存されており、試聴可能となっているが、研究資料として活用されているとは言い難い状況である。今後、方法論の確立が求められているといえよう。

演説レコードを聴くと、演説の多様性に驚かされる。論理型の代表とされる尾崎行雄は簡潔かつ明快に主張を展開しているが、若干地味な印象を受ける。一方、レトリック型の代表とされる永井柳太郎は、音量が非常に大きく、発音が明瞭で、主張は簡潔でレトリック過多という程ではないが、速度が遅くゆったりとした演説で、思わず眠気に誘われるほどである。対照的なのは中野正剛で、まくしたてるように鋭く主張を展開していく。

## おわりに

では、現在の雄弁家、オバマの演説はどうかだろうか。オバマの演説は音量の大きさ、発音の明



『永井柳太郎氏大演説集』（大日本雄辯會講談社）の新聞広告

瞭さ、主張の簡潔さ、魅力的な言い回しなどが特徴と言える。もちろん単純に比較することはできないが、永井柳太郎が「革新」をキーワードに、「藩閥打破」「日本は日本人の日本」であることを主張し、日本を一つにまとめようとしたことをオバマが「change」をキーワードに「黒人のアメリカも白人のアメリカもなく、アメリカ合衆国がある」と繰り返し主張し、アメリカを一つにまとめようとしていることには、共通する何かを感じざるを得ない。演説のちからで社会に変革をもたらそうとする者にとって、普遍的な問題があるのかもしれない。おそらく、時代も国も異なる両者に共通するのは、分断されている人々を一つにまとめようとする意思である。その意思が「演説のちから」を必要とし、両者を雄弁家にしていったのだと思われる。しかし、言うまでもなく、その意思は「ナショナリズム」の問題を避けて通ることはできない。永井は「転向」を余儀なくされたが、オバマは永井がたどった道を回避することができるだろうか。時代や日本とアメリカの社会のあり方の違いを越えて興味深い問題である。



本稿は、非文字資料としての演説の特徴と分析方法について、ごく限られた範囲について基本的な論点を指摘したにすぎない。これまでの成果を踏まえ、今後は演説研究の普遍的かつ体系的な分析方法の確立を目指し、演説という視点を通じて新たな歴史像を再構築していきたいと考えている。

**〈参考文献〉**

- ・高野宏康「演説のちから一戦前期の金沢における永井柳太郎の政治活動―」『歴史民俗資料学研究』第12号、2007年3月。
- ・高野宏康「雄弁家としての永井柳太郎―四つの演説論の分析を中心に―」『歴史民俗資料学研究』第13号、2008年3月。



『オバマ演説集』（朝日出版社、2008年）表紙

## 海外研究機関との提携

非文字資料研究センターでは、非文字資料にかかわる学術情報の交換を行うとともに、国際的な感覚を有する次世代の若手研究者の育成を目的とした研究者派遣・招聘事業を行うために、海外の研究機関との交流・提携事業を進めています。2008年度には下記6つの研究機関と提携を結びました。

### 2008年度の提携機関

中 国	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所 華東師範大学 中国民俗保護開発研究中心 浙江工商大学 日本文化研究所 中山大学 中国非物質文化遺産研究中心
カナダ	プリティッシュ・コロンビア大学 アジア学科
ブラジル	サンパウロ大学 日本研究所

## 奨励研究制度

非文字資料研究センターでは、非文字資料に関する研究者の育成を大きな目標として掲げ、独自の奨励研究制度を設けています。本制度は、世界的な研究拠点として、世界に通用する研究者育成のため研究費の支援を学内公募によって行うものです。審査の結果、2008年度は以下3名の研究が採択されました。

**研究課題**

のぞきからくり  
西日本の民家における土地神の信仰の分析  
『一遍聖絵』の図像学

**氏名（所属）**

坂井 美香（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）  
三村 宜敬（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）  
佐々木弘美（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

## ホームページ開設予定

非文字資料研究センターのホームページが開設される予定です（3月下旬）。

<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>